

ねん げつ にち
2022年9月11日

ねんかんたい しゅじつ
年間第24主日

きくち いさおだい しきょう
菊地 功大司教 メッセージ

しゅつ 出エジプト記は、モーセが不在の間、不信に陥ったイスラエルの民が、金の雄牛の鑄像をつくり、それにひれ伏しいけにえをささげた様子を記しています。民のこの行動は神の怒りを招きますが、モーセはなんとか神の怒りをなだめようと努めます。出エジプトの出来事を体験したイスラエルの民でさえ、先行きの不安に駆られ不信感が増大したときに、自分の心を落ち着けてくれる存在に頼ってしまう。人間の心の弱さを象徴している話です。

わたしたちは、基本的に変革よりも安定を望みます。自分の心を落ち着けてくれる道を探めようとし、その思いが募るとき、結果として手に入れるのは、自分の願いを満たしてくれる答えであり、往々にしてその答えは、真理とはほど遠い道であることが、この物語から示唆されます。

真理の道は神が用意された道であるにもかかわらず、不安や不信、または利己的な思いは、真理の道からわたしたちの目をそらせ、自分が思い描いた欺瞞の道へと誘います。そこに神のいのちはありません。

教皇フランシスコは、「福音の喜び」の中で、「出向いていく」教会であることを求めながら、教会共同体が福音宣教のために「司牧的な回心が要請する構造改革」に取り組むように求めています(27)。その上で、「宣教を中心とした司牧では、『いつもこうしてきた』という安易な司牧基準を捨てなければなりません(33)」と記し、自分たちが経験に基づいて思い描いている理想に固執することなく、常に聖霊の働きに心を開き真理の道を識別し続けるようにと求めています。

ルカ福音は、99匹の羊を野原に残してでさえも見失った一匹を探しに出かける「善い牧者」の姿を記しています。

このたとえ話の導入では、やはり過去のしがらみや倫理的基準に捕らわれたファリサイ派や律法学者が、罪人と食事をともにするイエスを批判する姿が記されています。自分たちの安全地帯に留まろうとする選択は、真理からはほど遠いことが示唆されています。

そしてイエスは、1対99の比較という選択肢を持ち出し、1をあきらめても99を確保するであろう常識的判断ではなく、神の判断は、一人も失われることなくすべてのいのちを徹底的に愛し守り救うのだという、神の真理の道を明確に示します。常識と、神の真理。わたしたちの立ち位置は、どちら側にあるのでしょうか。

2016年5月4日の一般謁見で、教皇様は、「わたしたちは皆、見失った小羊を肩に担いだよい羊飼いの姿をよく知っています。その姿は、罪人に対するイエスの心配りと、だれかが居なくなっても決してあきらめずに探してくださる神のいつくしみをつねに表わしています」と述べています。

その上で、「だれも何も救いのみ旨から神を引き離すことはできません。神は現代の使い捨て文化とは無関係です。まったく関係ありません。神はだれも見捨てません。神は皆を一人ひとり愛し、探しておられます。神は「人を見捨てる」ということばを知りません。なぜなら、神は完全な愛であり、完全ないつくしみだからです」と指摘されています。

更に教皇様は、「自分が「正しい」と思いこみ、自分自身の中に、自分の小さな共同体の中に、そして小教区の中に閉じこもってはなりません。それは、他者との出会いへとわたしたちを導く宣教への熱意が欠けているときに起こります」とも指摘されます。

常識と神の真理。わたしたちの立ち位置は、どちら側にあるのでしょうか。